

2015 年度 事業報告

本年度は、指定管理2期目の指定管理最後の年でした。繁茂する草木の後ろを追いかけながら、事業を一つ一つ実施して、1年は瞬く間に過ぎました。夏から秋には、2016 年度に始まる指定管理について、書類及びヒアリング審査があり、無事に指定を受けることができました。「自然生態園としての特徴をふまえ、明確な目的のもと、様々な事業を行っている」と評価を受けました。(参考:資料 31P)

【施設管理事業】

「維持管理水準書」に基づき、来園者の安心と安全をふまえた施設管理を行いました。園路周辺の枯木や枯枝の発生には特に注意を払いました。ベンチ等の腐食を点検し、塗替えや取替えを行いました。正門、詰所付近の清掃、園路周辺の草刈りや落枝拾いを行い、安心して散策できるように心がけました。

植生環境の豊かさを感じられる公園づくり 来園者が散策しながら、園路沿いの野草や木々の花を楽しめるように、植生環境を配慮しつつ草刈りや間伐を行いました。開花時には「植物名札」を参考に見られるように設置しました。名札は好評ですが、「もっと増やしてほしい」という要望も多くあり、野草だけでなく新たに、樹木の名札設置を予定しましたが、年度内には実施できませんでした。

作業者の安全 作業では事故の無いことを最優先に行いました。作業者の年齢もふまえ、作業中の健康管理と安全対策には一層の配慮をしていきます。

階段付近土壌の流出 林内では階段付近の土が雨水や踏圧浸食等により流出し、段差が広がり、勾配がきつくなっています。伐採木等を利用し、修繕しました。今後も適宜に手を入れていく必要があります。

樹木伐採 伐採作業は、枯木倒木や枯枝落下を排除し、安全に施設を利用していただくため、また生物多様性を図るために重要です。2月には横浜市に依頼し、田んぼの日照改善を目的として東山南斜面のハリギリ、コナラ等8本を伐採しました。さらに、造園業者にも直接依頼し、東山北斜面とカエル池の日照改善を目的としてムク、コナラ等5本を伐採しました。



伐採木

伐採木・刈草の処理と活用 伐採後、幹(丸太)は薪や土留めにしました。枝はチップにし、堆肥または近隣のランニングロードの敷材として提供するなど、利活用を図りました。ササはチップにかけ堆肥に、草は細かくして畔などに敷きました。大きな問題は、成長し重量化する樹木に比して、伐採した丸太を置くスペースがなく、広場の隅を使って置かざるを得ないことがあります。運搬作業も、重量に比例して危険が増しています。作業員(会員・ボランティア・スタッフ)の安全を優先し、自然保全と伐採及び利活用を両立していけるように、横浜市の公園行政の一環において検討いただけるように相談をしていきます。

その他 ・スズメバチ 本年度は幸い、被害はありませんでした。春の女王バチ捕獲トラップは個体数減に効果があるようです。また、夏から秋の作業や催し前には、巣の有無を入念に確認しました。今後も被害を出さないよう、個体数抑制と巣の有無点検は重要な管理作業となります。

・アライグマ 春先の飼育ザリガニ等の捕食被害をアライグマによるものと疑い、夏以降、捕獲檻を設置しましたが、捕獲できませんでした。現在の生息について明らかではありませんが、広く移動する習性もあり、一旦定着し増加すると、生態系への被害は甚大となるため、注意が必要です。

今後の課題

・伐採木処理と活用 ・作業者の安全対策

【自然再生事業】

<植物管理>

特に大きな問題は生じていませんが、東西の山での高木の成長による日照不足、低木類の増殖による林床の暗さが気になる場所が多くあります。高木については、東山、西山の田圃を囲む領域で、田圃の日照確保のために10数本の伐採を行い、ある程度改善はされたが十分ではありません。これまでも、高木の間伐により明るさを確保しようとして来ましたが、最近に残された低木類や高木の实生株の成長が目立ち、これらが林床を暗くしている場所が多く、対策が必要です。

2011年度から日照改善の試みとして、低木・小高木を中心とした整理を行って来ましたが、昨年度の報告で課題とした東山北側斜面の手入れについては、部分的に実施できましたが、十分ではなく、また間伐による林床の改善状況についてももう少し見守る必要があります。低木や小高木を中心とした整理は、今年度も全域で続けていく必要がありますが、人手不足は否めず、苦しいところです。

しかし、全体的には植生環境は改善されつつあり、開園時からの課題であった落葉低木類の安定した生育もほぼ達成されつつあります。特に気がかりであった、カマツカ、マユミ、ガマズミ、ヤマコウバシ、ハナイカダなどは新たな実生株の生育、開花が各所で見られるようになって来ましたが、草本類や蔓植物についても改善が見られ、ナンバンギセルの定着、オオバノトンボソウの新株発生、フデリンドウ、ウラシマソウ、オカトラノオ、ギンラン、ササバギンラン、サクラタデ、シロバナサクラタデなどの増殖、ミツバアケビ、クマヤナギの結実など好ましい結果が得られています。一方、ヤマハタザオ、イチヤクソウ、オケラ、オトギリソウなどの生育状況は依然として思わしくありません。



ナンバンギセル

帰化種の侵入にも注意していなければなりません。ハルジオンやオオイヌノフグリなど日本中どこでも定着しているものは別として、オオスズメノカタビラ、フラサバソウ、ミチタネツケバナなどの侵入が気になるものの、ヒメオドリコソウ、ホトケノザ、ウシノケグサ、カモガヤ、外来チチコグサ類など街路では至る所ではびこっている種は殆ど見られず、在来種による植生環境が安定しているためと考えられます。

<水辺管理>

水質調査とアメリカザリガニ駆除を週1回、生物モニタリングを月1回、希少魚調査を年4回、実施しました。

水生生物 在来生物の生息状況に大きな変化はありませんが、モクズガニは増え続けています。貝の捕食等も懸念されるため、注意し観察しています。また、これまで確認されなかった魚類のカワムツとアブラハヤが採捕されました。他の河川での放流報告もあることから、国内移入種として注意しています。

ニホンアカガエル 保護6年目、産卵数は9卵塊と、成熟した個体数は昨年同様と推定されましたが、その後の幼生の生長をカエル池で観察することができ、安定した繁殖状況を確認することができました。

アメリカザリガニ これまで同様の頻度と方法で駆除を続け、園全体での捕獲数約1400は、昨年より400近く減少し、生息数を抑制していると考えられますが、努力量を減らせば元に戻ることは明らかで、継続が大切です。(参照:資料7-8p)

かいぼり 本年度も3月に、およそ1週間前からポンプで排水し、水の流入口付近2箇所をの泥を浚い、田んぼへ入れました。その際、5cm大のヌマガイ稚貝(当歳と想定される)を複数個体、確認することができ、再生産を確認しました。



ヌマガイ

<昆虫観察>

会員の協力を得て、昆虫の観察を続けました。その結果、本年度の確認種数は昨年度より77種多く、603



シロスジカミキリ

種となりました。(参考:資料 9P) 観察と併せて様々な昆虫の姿を撮影した写真を、多くの方が、地域の昆虫の豊かさを感じられるように会報等に掲載しました。しかし、かつて身近に多くいた昆虫でも、見られなくなっているものが多くあります。そうした変化を記録するために、観察協力者を増やさなければなりません。その為にも、観察の成果を自然体験や保全活動に活かし、活動への参加を増やす方法を模索しています。



保全作業のあとで

<保全作業>

複数の新規参加者があり、その方々の継続が期待されます。大学生や女性、小学生親子もいらして、元気に作業を行うことができました。長く継続して参加してくださっている方々の存在と、地道な広報活動を続けてきた成果とも考えられます。引き続き、多くの方の参加を促すことができるように、広報を行う必要があります。

今後の課題

・低木、高木整理 ・生物保護 ・保全参加者募集

【田んぼづくり事業】

米作り体験をにぎやかに楽しんでいただきました。一方で、3団体が同じ粳米を同じ手順で育てていますが、諸作業の時期や僅かな条件の違いによって、収穫した米の質量に微妙な差が生じました。米作りの難しさを改めて感じた年でした。

「昔ながらの米作り」 72人の親子さんたちと、米作りを行ないました。10組のリピーターさんたちの経験も力となり、順調に1年間の作業が進みました。皆で働き、学び、美味しいおもちをいただき、来年のために田んぼの準備をする一連の共同作業を楽しむことができました。次年度も9組のリピーターさんが参加の予定です。(参考:資料 14-16)

小学生の米作り 茅ヶ崎小学校、茅ヶ崎東小学校5年生の米作り学習を支援しました。大勢で泥んこになりながらの農作業は子どもたちの貴重な体験の一つとして心に刻まれているようです。

畔 崩れが広がっています。堰付近では水が抜けてしまうことも度々あり、また畦道は、来園者の散策道としては狭くて歩きにくくなっています。公園事務所に修復を依頼します。

今後の課題

・畔の修復



マーマレード

【自然環境教育事業】

開催にあたっては、会員の“ねこの手”サポートをいただいて手際よく運営できました。また、会員の撮影により、催しの様子をウェブアルバムに限定公開し、参加者に楽しんでいただくことができました。

課題は、広報に際して一般の方々が想像しにくい内容を「チラシ1枚、或は紙面上約100文字で楽しさをどう伝えるか」です。また、子どもに喜んでもらうために、「生態園の夏ミカンマーマレードの苦味をいかに抜くか」は今後のチャレンジ課題です。

観察 他所ではあまり開催されていないクモ、土壌動物、カエル(おたまじゃくし)のような観察会や、定番の野の花、キノコ、鳥、冬の生きもの、セミの羽化、トンボのヤゴ等の観察会を、月1回程度開催しました。講師の方々には、参加者に地域の豊かな自然・生物との出会いを楽しく、わかりやすく案内、説明していただきました。

体験 自然の恵みを使い、“草だんご、昆虫標本、たき火・やきいも、マーマレード、ネイチャーゲーム、わき水遊び、きこり体験*”等、都会における自然体験を開催しました。特に“食”を楽しむ催しは大人気でした。

*伐採枝を動物園の動物に餌として提供する催し

「めざせ ザリガニマスター！」 参加者はこれまでに 200 人を超え、2段1人(ザリガニ 1000 匹採集)、初段7人(500匹)、マスター20人(300匹)が誕生しています。全国的に水辺の在来魚類や水生昆虫、水草等を脅かす外来種、アメリカザリガニをテーマに「遊び・学べる催し」として定着しました。(参考:資料 32p)

教育機関支援 茅ヶ崎小学校、茅ヶ崎東小学校の授業での利用、クラブ活動での植物観察や竹切り体験支援のほか、保育園のお散歩案内等行いました。



昆虫標本づくり

今後の課題

・広報の工夫

【自然の普及啓発】

来園者や地域の方々が当施設に親しみ、楽しめるように、質問等には丁寧に応えました。また散策や自然を観察するときの参考になるように工夫し、展示、発行物を作成しました。

展示・パネル等 季節の自然や植物、生物を紹介する写真やパネル、また、催し等活動の紹介、かつての地域の姿を描いた「茅ヶ崎八景」、飼育している生物(ザリガニ、魚類、おたまじゃくし、カエル等)、また開園日当日に採集した生物(モクズガニ、ドジョウ、アオダイショウ等)を展示しました。

『ようこそ生態園へ』 春号、初夏号に続いて3冊目となる夏号の発行に向けて、正確なガイドブックになるように、植物グループの皆さんが検討と編集を重ねています。既刊の2冊は、購入者から「普通の図鑑と違って地域の植物がとても丁寧にわかりやすく説明してある」と好評です。

今後の課題

・展示の充実

【運営ほか】

茅ヶ崎のむかしを聞く 茅ヶ崎に長く暮らしてきた方々にご協力をいただいて、昔の生活の記憶や開発の頃の様子等についてお話しを聞く会を3回開きました。かつての自然の様子や普段の暮らしを想像しながら、現在の生態園を見る上で大いに参考となりました。今後も出来る限り続けて、記録していく予定です。

来園者アンケート 108 通の回答が寄せられました(参考:資料 10-13p)。「虫がいるし楽しいところ」「自然を満喫できる」「子どものころを思い出す」というような感想を多くいただいています。逆に「平日もあけてほしい」「池の水が汚い」「大径木を伐り過ぎでは」等の要望や意見もあります。生態園からの説明や情報が来園者に届いていないと感じられる場合もあるため、よりわかりやすい広報や掲示を工夫する必要があります。来園者の意見には耳を傾け、出来る範囲で対応していきます。

地域・他団体との連携 ・薪と枯枝 地域の「おやじの会」が主催する行事で使用するために薪や枯木枝を提供しました。園内の落枝等は相当な量が発生し、あちこちに“枯枝の山”ができてしまっていますが、小学校の「昔遊び」の焼いもや「もちつき」にて大量に使用いただき、2月には山をかなり減らすことができました。

・環境調査 東京都市大学により、園内4か所で気候(気温、湿度、風向等)の連続計測が行われました。都市的環境と比較し、都市緑地の意義とヒートアイランド現象の解析を試みるものです。(参考:資料 21-22p)

・保全作業参加 神奈川大学学生18人が8月に、池端でササ刈りを行いました。

事務局スタッフ 数年前に行われていた大学生の水生物研究からの縁により、新しいスタッフを迎えることができました。